

## 活動報告

# 「学生が変わる日本大学」第1章

## —「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」における取り組み—

浅野和香奈\*<sup>1), 2)</sup>, 瀬戸山自然<sup>1), 3)</sup>, 前川貴恵<sup>1), 4)</sup>, 今宮加奈未<sup>1), 5)</sup>,  
羽入敏樹<sup>6), 7)</sup>, 大嶽龍一<sup>6), 8)</sup>, 後藤裕哉<sup>6), 8)</sup>

<sup>1)</sup>「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」学生コアメンバー, <sup>2)</sup>日本大学工学部土木工学科3年,

<sup>3)</sup>日本大学通信教育部経済学部経済学科3年, <sup>4)</sup>日本大学文理学部中国語中国文化学科4年,

<sup>5)</sup>日本大学文理学部哲学科平成26年3月卒業,

<sup>6)</sup>日本大学全学FD委員会プログラムワーキンググループ(「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」教職員スタッフ),

<sup>7)</sup>日本大学短期大学部(船橋校舎), <sup>8)</sup>日本大学本部学務部

本稿は、日本大学における「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」開催までの道のりと、開催後のアンケート結果から、今後の課題と展望を述べたものである。

「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」は一般的な学生FDイベントと違い、様々な学部から成り立っている日本最大規模の総合大学だからこそできる“日本大学独自の学生FDサミット”と言える。そもそも、日本大学において全学的なFD活動が始まったのは平成20年4月のことである。それ以来、立命館大学で開催された「学生FDサミット2013夏」及び岡山大学で開催された「第9回教育改善学生交流i\*See2013」への参加や文献研究を通じて、情報収集などを積極的に行ってきた。この二つの学生FDイベントへの参加により、学生FDへの理解を深めることができた。この経験をもとに、日本大学においてもスケールメリットを生かした大規模なイベントを開催してはどうかとの意見が出された。こうして「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」の開催が決定したのである。

決定からの開催までの道のりは、学生コアメンバーが対談形式で述べている。なぜ学生がFDに参画するのか、また、第1回目から開催までのミーティングの様子をそれぞれ対談が行われている。さらに、当日の参加者からのアンケート結果を分析し、今後の課題と展望を明らかにしてある。今後の日本大学における学生参画型FDの普及の足掛りとなること、また、日本大学から発信する新たな「学生FDサミットモデル」となることを期待する。

キーワード：FD (Faculty Development), 学生FD, 「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」

### はじめに

日本大学(以下、「本学」とする)は、平成20年に日本大学FD推進センター(以下、「本センター」とする)を開設し、「自主創造」の教育理念・目的の下、教職協働・学生参画を意識し、ファカルティ・ディベロップメントを全学的に推進している。

開設から5年、本センターはFDに関する様々な活動をこれまで行ってきたが、その大きな活動の一つとして、平成26年2月26日に「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」を本学法学部10号館において開催したことが挙げられる。「日本大学 学生FD CHAmmit」は、全国展開されている“「学生FDサミット」の

日本大学版”ともいえるものであるが、本学で行われた「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」は、一般的に考えられる「学生FDサミット」とは一味違う。

日本最大規模の総合大学と呼ばれている本学が抱える問題と特色を生かした“日本大学ならではの「学生FDサミット」”であり、今回開催された本センター主催の「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」は、各大学が「学生FDサミット」主催校に集合し大々的に行われるものとは、趣旨も形態も別のものなのである。

本学は、その学生数に比例する多様な学部を抱えており、現在は14学部・通信教育部などで構成されている。そのようなことから、一つの敷地内に全ての学部を収めることは不可能であり、キャンパスは広範囲に分散する、いわゆる分散型キャンパスと呼ばれる形態をとり、学部ごとにキャンパスを設置している。学部ごとのキャンパスは多種多様であるため、各学部間の連携が取りづらく、学生同士の交流も自学部以外では期待できないという問題を抱える。

そこで、「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」のテーマを“学生が変える日本大学”とし、普段交流のない他学部の学生・教員・職員との意見交換をし、学部の垣根を超え、広く学生FD活動が認知・浸透されることを主目的とした。今後、学生FD活動が発展することを期待し、「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」の全容と詳細について、述べることにする。

## 1 日本大学におけるFDの定義、日本大学FD推進センター基本計画（中期計画）などを背景とする「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」を開催するに至った経緯

本節では、教職員の視点から、本学におけるFDの定義などを踏まえながら「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」開催までの経緯を説明する。

### 1-1 日本大学におけるFDの定義と基本計画（中期計画）

本学では、平成20年4月に日本大学FD推進センターを設置し、全学的かつ組織的なFD活動を推進してきた。そして、本学におけるFDの定義を「自主創造の理念の下に日本大学を取り巻く外的諸要因をも分析して、学問領域単位（学科・専攻等）での教育プログラムを常に見直し、それを実行するため、教員が職員と協働し、学生の参画を得ながら組織的に取り組む諸活動」と定めているように、本学におけるFD活動は、教員と職員が協働すること、さらには、学生の参画を得ながら進めていくということが明確に掲げられている。

現在は、平成25年度から平成27年度の3年間の基本計画（中期計画）（以下、「中期計画」とする）の下、更に具体的な活動を展開するための年次計画を定めている。この中期計画は、①「日本大学におけるファカルティ・ディベロッパー（FDer）の在り方の検討」及び②「学生参画型FD活動の整備・強化」の2つとなっており、②に掲げられているとおり、本学では、平成25年度から全学的かつ組織的に学生参画型FDについての調査研究や具体的な展開に関する検討を始めた。

### 1-2 学生参画型FD活動に向けた日本大学全学FD委員会（日本大学FD推進センター）における取り組み

前項でみた中期計画を踏まえつつ、3つのワーキンググループ体制で展開している全学FD委員会では、各ワーキンググループにおいて、学生参画型FDを捉えた活動を始めた。

全学FD委員会調査・分析ワーキンググループでは、例年、全ての学部・短期大学部・研究科を対象に行っている「FD等教育開発・改善活動に関する調査」の調査項目に学生参画型FDに関する意識や実態に係

る調査項目を追加したほか、立命館大学で開催された「学生FDサミット 2013 夏」<sup>1</sup>や岡山大学で開催された「第9回教育改善学生交流 i\*See2013」<sup>2</sup>への参加や文献研究を通じて、情報収集などを積極的に行ってきた。また、全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループでは、学生参画型FDを意識した特集記事を組むなどして、各種媒体（『日本大学FDガイドブック』、「日本大学 FD NEWSLETTER」）への掲載を始めた。

そして、全学FD委員会プログラムワーキンググループでは、学生参画型FDの在り方を探っていくために、「①他大学学生FDネットワーク等への参画の検討」、「②学生と教職員によるFD座談会の検討及び企画・実施」の2点を平成25年度活動計画に掲げた。当初は、情報を収集し、あらゆる学生の意見を聴いてみるといったスタンスしかなかったのが実情である。

### 1-3 立命館大学「学生FDサミット」と岡山大学「教育改善学生交流 i\*See」への参加とその影響

このように、全学FD委員会では3つのワーキンググループにおいて、学生参画型FDに係る調査や検討などが始まったが、あくまでも3か年の中期計画のうちの1年目ということもあり、本学における学生FDの在り方に関する一定の結論を得るまでには、相応の時間を要することが予想されていた。そのような中、平成25年夏に転機が訪れた。全学FD委員会委員の教員3名と学務部教育推進課の職員3名<sup>3</sup>が、平成25年8月に立命館大学で開催された「学生FDサミット 2013 夏」に参加した。日本大学FD推進センターとして、学生FDサミットには追手門学院大学で開催された「学生FDサミット 2012 冬」から参加していたが、この立命館大学の学生FDサミットで過去最多の教職員合わせて6名が本学から参加したことにより、より多くの成果とインパクトを本学に持ち帰ることとなった。それでも、この時点で学生の参加は、文理学部学生FDワーキンググループの5名のみで、他の学部からの参加者はいないという状況であった。

この学生FDサミットには全国50大学から453名の学生が参加し、各大学の様々な取り組み紹介や分科会などが企画され、短時間ではあったが、しゃべり場<sup>4</sup>も行われた。各種の取り組みについても、先輩学生が後輩に授業等でサポートを行うSA・LA制度<sup>5</sup>などの具体的な取り組みから、学生生活全般までを捉えた広義の学生FDに取り組む活動など、かなり幅広い活動について情報を得ることができたとともに、それぞれの学生の前向きで「いきいき」とする姿を目にすることができた。

また、同年9月には、具体的なテーマを掲げる学生FDイベントとして有名な岡山大学「教育改善学生交流 i\*See 2013」にも参加し、少し違った角度から学生参画型FDを学ぶことができた。

### 1-4 「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」の企画・開催の検討と決定

平成25年夏に2つの学生FDイベントに参加し、学生参画型FDについての理解をより深め、本学における学生参画型FDの展開に向けた検討への準備ができつつあった。全学FD委員会プログラムワーキンググループでは、当初予定していた「学生と教職員によるFD座談会（仮称）」の企画・開催について、「学生FDサミット」をヒントとし、本学のスケールメリットを生かした大規模なイベントを開催してはどうかとの意見が出された。その後、周囲の同意を得ながら急速に全学的なイベントの開催に向けた機運が高まりをみせた。同年9月20日に開催された全学FD委員会プログラムワーキンググループ会議で企画案を検討し、同10月2日に開催された全学FD委員会において開催要項が承認され、企画名も“チャット”（chat）と“サミット”（summit）を掛け合わせた「CHAmmit（ちゃみっと）」という造語を盛り込んだ「日本大学 学生FD CHAmmit」と定められた。

本来であれば、年度内のイベント予定の規模を急遽拡大して開催することは、周囲の理解とエネルギーが必要となる。実際のところ、この背景として、追手門学院大学で開催された「学生FDサミット 2012 冬」で初めて「学生FDサミット」に参加した文理学部の学生と学務部教育推進課の職員が『学生FDサミット』

のようなイベントをオール日大で開催したい」という思いを抱いたことに端を発する。また、これまで本学の学生FD活動を唯一実践していた文理学部学生FDワーキンググループの学生スタッフと彼らを支える文理学部の教職員による苦労や努力を目の当たりにしてきたことや、彼らの全学的な学生FDイベント開催に向けた熱意によるところが大きい。さらには、「学生FDサミット2013夏」における全国の学生・教員・職員の活発な姿や多くの活動報告などに本学から参加した6名の教職員が刺激を受けたことによるものといえる。

これまでみてきたような経過を経て、「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」は開催に向けてまい進していくこととなり、その後の準備も時間や予算の限られた中、全学部等から集まった「学生コアメンバー」<sup>6</sup>や全学FD委員会プログラムワーキンググループをはじめ、全学の教職員の協力を得ながら進められていくこととなった。

## 2 学生コアメンバーによる対談

本節では、学生コアメンバーの視点から、各テーマについての考えを対談形式で述べる。

### 2-1 対談テーマ なぜ学生が「FD」に参画するのか？

対談者：今宮加奈未（日本大学文理学部哲学科平成26年3月卒業 文理学部学生FDワーキンググループ）

前川 貴恵（日本大学文理学部中国語中国文化学科4年 文理学部学生FDワーキンググループ）

FD（Faculty Development）の現段階での定義

「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。」

中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像」答申（平成17年1月）

前川：なぜ学生が「FD」に参画するのか？ということではじめにFD（Faculty Development）の定義を参照してみたわけですが……文部科学省の答申には、「学生が参画するFD」についての記述はありませんね。

今宮：そうだね。「学生参画型FD」について、具体的な成果や実感がまだ認められていない日本の現状がわかるね。

前川：本項では「なぜ学生が「FD」に参画するのか？」について取り上げますが、中央教育審議会の答申で具体的な定義がない以上、ここでは学生自身が持つ所感や意義について対話するのがいいでしょうね。早速ですが、どうして今宮さんは学生としてFDに関わろうと思ったんですか？

今宮：私が「学生参画型FD」に関わったきっかけは、2011年秋に文理学部で開催されたFD講演会でした。「学生FDの父」と呼ばれる京都にある立命館大学の木野茂先生がゲストの講演会で、学生が教員とともに授業について考える活動があることを教えていただきました。当時の私には、かなり刺激的な取り組みに思えたよ。前川ちゃんは学生FDを全く知らない状態から、声をかけられて学生参画型FDに触れたわけだけれど、「学生FD」の第一印象はなんだった？

前川：そうですね……私は元々、学園祭実行委員とかとは違う、学校生活・大学の授業に関われることをやりたかったんです。「私は大学に勉強をしに来ていて、それに関われる活動である」ってことに意義

を感じました。あとは、「こういう活動を通していろいろな考えを持つ学生と話ができそうだな」と思えたことですかね。「いろんな人と意見を交わせる授業が増えたらいいな」と思っていました。

今宮：学生FD活動を通して、面白い人たちと出会って、真面目な話をしてみたいってということかな？

前川：そういうことです。

今宮：それなら学生がFDに参画する意義は「成長・社会経験の場を得る」と言っても良いのではないかな。

前川：そうかもしれない。結局私は、自分がいろんな人と話してみたいって自分の希望を実現しているので。

今宮：ところで、今のFDの定義には「学生同士の対話・交流」という要素は全く含まれてないんだよね。FDは教員対学生の問題であって、学生同士の関わりは勿論、職員が存在というのは全く想定されていないようなの。しかもFD活動って、どちらかというところ「できない教員をできる教員に変えていくための活動」という認識が一般的みたいよ。

前川：そう言われてしまうと、自分が学生としてFDに参画しているのってどうなの？と思ってしまうます。

今宮：この反応って、文理学部学生FDワーキンググループスタッフならではのものだよ。学生参画型FDに参加している他の大学の学生に話を聞くと、「この先生の授業が嫌だから意見を言おう！」って、組織を立ち上げていることが多いような気がする。だから学生がFD活動に参画するイメージって、本来、すごくネガティブなんだろうね。

前川：文理学部学生FDワーキンググループとその他大勢の学生FD団体って何が違いますかね？

今宮：目標かな。取り組んでいる活動は同じだけど、欲しいゴールが違う。

前川：私が学生FDサミットで感じたのは、ほかの大学の学生の多くは「マイナスからの脱却」を目指していて、プラスマイナスゼロの地点をゴールにしているのかなっていうことですね。

今宮：文理学部学生FDワーキンググループの、少なくとも黎明期スタッフはポジティブなゴールを大学に対して協力や対話を求めている、それがたまたま関西で取り組まれている学生参加型FD活動で実現できそうだったから関わっていった、っていう側面があるかもね。先生方は反対に「授業に対する学生の意識を知りたい」という思いがあって、目的は違うけど同じ活動をするということで、文理学部学生FDワーキンググループは上手くやって来られたのかな。

前川：そうかもしれませんが。しかし多くは、学生からクレームが来て、教員がそれに対処する。これが本来のFDの在り方ではあると思います。

今宮：FDはしばしば「授業改善」と翻訳されるけれども、改善という言葉は学生にはそぐわないよね。

前川：その言い方だとどうしても「下手・できないを変えていく」というイメージがありますね。否定している感じがします。……さて、本題に戻りまして、今宮さんは学生として2年間FD活動に従事してきた経験から、学生がFDに参画する意義をどう考えますか？

今宮：率直に言うと、学生にとってFD活動に参画する意義は前にも述べた通り、「成長・社会経験の場を得る」ことじゃないかな。具体的には、「自分の所属する大学の授業に対する積極性を養う」ことです。「学生参画型のFD」活動は授業改善活動を教職員と連帯しつつ、学生が学生に働きかけることで推進する活動と言えると思うな。学生FD活動をする中で、専門家である教員の授業にTA・SAの立場を超えて少なからず意見をやる局面もあるかもしれないのだから、学生として最低限授業を熱心に受講する姿勢は必要だと思う。特に、これからFDに参画しようと思っている日本大学の学生には、単に消費者意識に則ってクレームだけを述べるような活動とは履き違えて欲しくないな。

前川：義務を果たさずに権利だけ主張するのはよくないですね。さて、冒頭でも述べたように、学生参画型

のFDは「社会的意義」というほど、大きなことは成せていないんですが、このことについてどう思いますか？

今宮：歴史的にも、学生FD導入大学の活動は、岡山大学を筆頭に、約10年といわれているから意義と言えるほどのことは成せていないね。でも、私は学生FDを通じて先生と対話の機会を持てるのは大きなメリットだと思うな。教室の後ろにいる学生は、授業中わからないことについて、教員に意思表示していいなんて思ってもいない。そのために教室全体が硬直している授業にいくつも出席したことがあるよ。学生が変われば、授業が変わる。大学全体の雰囲気が変わるような気がする。それが、学生がFDに参画する意味だと思うの。

## 2-2 「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」開催までの道のりと当日の様様

対談者：瀬戸山自然（日本大学通信教育部経済学部経済学科3年 資料作成担当代表）

前川 貴恵（日本大学文理学部中国語中国文化学科4年 文理学部学生FDワーキンググループ）

### 初の顔合わせ：“学生コアメンバー第1回ミーティング”

瀬戸山：「日本大学 学生FD CHAmmit」当日の約3か月前に学生コアメンバー初の顔合わせである学生コアメンバー第1回ミーティングが日本大学会館で平成25年11月16日（土）に行われました。想像していたよりも柔らかい雰囲気だったのを覚えています。個人的には、頭の良い人やまじめな学生が参加するイベントだと勝手にイメージしていましたが、みんな普通の学生でしたね。

前川：最初だからか、ミーティングが始まるまで自然と男女別のグループに分かれて自己紹介していましたね。それでも、なんとなくお互いに打ち解けてくれてちょっと安心しました。

瀬戸山：少し緊張がほぐれましたね。そうこうしている間にミーティングが始まり、担当教職員の紹介や「日本大学 学生FD CHAmmit」の趣旨説明がありました。学生FDサミットの参考映像上映やアイスブレイクをしたことで、学生FDの活動について、より理解を深めることができました。特にプチしゃべり場での「大学はあなたにとってどんな存在？」をテーマにしたグループ討議が一番の収穫で、他学部の授業や学生・教職員の様子や自学部で感じていることを知ることができました。分散型キャンパスである日本大学では、学部間の交流の機会があまりなく、他学部の情報をなかなか知ることができないので、この企画は大変有意義だったと思います。

前川：その後は役割を決めたんだよね？

瀬戸山：はい。その後、資料作成担当、企画運営担当などの実施組織を決定しました。それぞれの係の取りまとめ役になった人で集まり具体的な「日本大学 学生FD CHAmmit」の内容の説明とスケジュール確認し、企画運営担当の人が1か月で大本の企画案の作成をするということで第1回目のミーティングが終了しました。

前川：この日から12月21日（土）の第2回ミーティングまでの間で、企画運営担当は白紙状態の案を完成させるために一生懸命でした。11月20日（水）～26日（火）の一週間で企画案の募集、11月27日（水）～12月2日（月）で企画案の投票を行い、大卒の企画案を決定しました。その後、12月16日の企画書提出日まで、決定案の詳細を企画運営メンバーが班毎に分かれて練っていきました。

### 第2回打ち合わせ：“学生コアメンバー第2回ミーティング”

前川：第1回ミーティングの約1か月後の12月21日（土）、日本大学桜門会館において第2回ミーティ

ングが開催されました。サブリーダーの田仲くんの発案でアイスブレイクを目的とした「他己紹介」をしました。その後は文理学部学生FDワーキンググループ代表の今宮さんから「学生FDサミット」開催例と学生FDについて、簡単な紹介がありましたね。

瀬戸山：実は、「日本大学 学生FD CHAmmiT」を運営する学生コアメンバーのほとんどが学生FDを知らなかったんですね。

前 川：学生FDについての紹介は学生コアメンバーにとっても「学生FD」を理解する良いきっかけになったんじゃないかと思います。

瀬戸山：何が一番大変でした？

前 川：やっぱり枠になる企画案作成かな。この日に決定した詳細案を企画運営担当が発表しました。各企画には意味があり、「日本大学 学生FD CHAmmiT」は日本大学の全学部から学生・教員・職員が集まることを考慮し、今後の各学部におけるFDの普及・展開に結びつくように設定しました。各企画の詳細と意味については、次のとおりです。

共同企画	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岡山大学教育開発センター准教授(当時)・天野憲樹氏と学生コアメンバーによる基調講演。</li> </ul> <p>⇒FDとは何かを「日本大学 学生FD CHAmmiT」の参加者に伝えることが重要である。</p>
学部ミーティング①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・共同企画によりFDについて理解が深まった後、学部ごとに授業、教育、学修の問題点・評価点を話し合う。</li> </ul> <p>⇒学部ごとで抱える授業、教育、学修の問題も、また、学生の意識も違うことから、学部ミーティングを設けることで、学部ごとの具体的な問題点や評価点が見えてくる。</p>
ランチ会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部を越えた交流をすると同時に、あるテーマについて話し合う。</li> <li>・お題は、自分の学部・学科の良い点を上げ、良い所から学べることや、残していくべきことを明確にする。</li> <li>・学生の意見だけでなく、教員や職員の立場からの意見も聴く。</li> </ul>
テーマ討論会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業、教育、学修に関連したテーマについてランチ会のグループごとに話し合う。</li> <li>・学生の意見だけでなく、教員・職員の立場からの意見も聴く。</li> </ul>
各グループ発表会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ランチ会、討論会での結論を発表する。</li> <li>・発表後、質疑応答を行う。</li> </ul>
学部ミーティング②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループの発表を基に、学部ミーティング①での問題点評価点から各学部で今後活かせる点や改善点をまとめる。</li> </ul> <p>⇒大学全体よりも学部ごとにまとめる方が、今後活かせる点や改善点など漠然としていない具体策が得られる。今回の目的でもある“学生FD”の認知度を上げるためにも、大学全体よりも学部からのアプローチが大切だからである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・最後に、2~3 学部に学部ミーティングでまとめたことを発表させる。</li> </ul>

瀬戸山：この順番で学生参画型企画を進め、各学部の問題点や改善点が明確になったと評価をいただきました。そして、この日の打ち合わせからその次の打合せまでが、私が担当した資料作成担当の活動期間になりました。

## 大雪で大ピンチ?!：“学生コアメンバー第3回ミーティング”

瀬戸山：学生コアメンバー第3回ミーティングが行われた平成26年2月15日（土）は、記録的な大雪の影響でミーティング開始予定時刻に集合できたメンバーは20名中4名と、最悪な状況でした。最終的に半数以上は集まることができたので、ミーティング内容を変更して進めることができました。大幅に予定を変更しましたが、まずは当日の会場となる機材・設備・使用教室の確認をしました。実際に当日を模して設営したりしました。その後、当日の流れの説明、内容の最終検討、しおりの確認を全員で行いました。当日までの残日数的にも、このミーティングが最後の変更・修正ができる機会だったのでみんな真剣に検討しましたね。結果、しおりの多くの部分を訂正しなければなりませんでした。「ちゃみっとーく！」や「オール日大ミーティング」もこのミーティングで命名したんですね。

前川：私は参加できませんでしたが、そういえば、ファシリテーター研修をやったそうですね。メールでも何通かに分けて「ファシリテーター通信」が届いていましたよ。

瀬戸山：はい。今宮さんによるファシリテーター研修を行いました。そこで、ファシリテーターが2つの班をなんとか担当できることがわかりました。3回目とはいえ、なかなか会話が弾まない班もある中、ファシリテーターがそこに加わることで、会話が弾んだり、場が盛り上がったりと、ファシリテーターの重要性を再認識しましたね。

前川：今宮さん曰く、「ファシリテーターはエンジンとブレーキ、対話の火を燃やすことと、脱線しそうになったらそれとなく戻していく役目」だそうです。

瀬戸山：ファシリテーター研修も終わり、最後に当日の役割分担を決めなければならなかったのですが、学生コアメンバー第3回ミーティングに参加できなかった学生コアメンバーもいたため、初めは少し難航しました。最終的には全て時間内に決定できたので安心しましたが、今回は色々と密度の濃いミーティングで本当に疲れました。“第1章”というのは大変なものですね。

## 前日準備（設営・最終リハーサル）

前川：2月25日（火）に「日本大学 学生 FD CHAmmit」前日リハーサルがありましたね。法学部10号館に集合時間9時40分で冬の寒さが沁みました。さて、そんな時間から何をしていたかといえば、配布資料のセッティングです。1011講堂の参加者が座る席にしおりや共同企画用の色画用紙、ネームプレート、お茶、ペンなどを設置しました。他のランチ会や「ちゃみっとーく！」の会場の机の移動は男子の学生コアメンバーと男性職員さんが頑張ってくれました。女子の学生コアメンバーは、案内版を張ったり、受付を作ったりしました。

瀬戸山：設営が終わったら、当日の動きを軽く確認したんだよね。

前川：ランチ会は実際に会場でみんなで食事をして、この日に到着した日本大学文理学部OBの天野憲樹先生（当時・岡山大学准教授、現在・埼玉大学教授）と一緒にお話もしましたね。実はその後が大変でした。

瀬戸山：文理学部学生FDワーキンググループによる共同企画のリハーサル、長かったですよね。

前川：台本の完成稿が上がったのが実は「日本大学 学生 FD CHAmmit」当日で練習する時間もなくて、リハーサルで仕上げまで持っていったようなものです。

瀬戸山：共同企画ではどのような工夫をしたんですか？

前川：共同企画の目的は、「日本大学 学生 FD CHAmmit」参加者に学生FDがどんなものかをわかりや



すく伝えることでした。参加者の共感を得ながら企画を進めるようにしました。

瀬戸山：クイズで青と赤の画用紙を挙げるのは面白かったです。

前 川：「ずっと説明を聞いているのは参加者が退屈するだろうな」と思ってクイズを挟んでみました。隣の人と相談するのもありで、意見を気軽に交換できればいいな、と。

瀬戸山：結局リハーサルは19時までやったんだっけ？

前 川：そう、公称19時。閉館するまでにはみんな帰ったよ。照明の演出をどうするかをその場で決めたから、すごく時間がかかっちゃったね。

瀬戸山：客席から見て見やすいスポットの当て方を試行錯誤していたら遅くなったね。

前 川：照明の演出の工夫は共同企画だけじゃなくて、学生参加型企画（しゃべり場形式）の説明もそうだったけども、こっちはそんなに時間かからなかったね。

瀬戸山：そんなこんなで、翌日の「日本大学 学生 FD CHAmmiT」当日に備えて、21時頃に解散しました。

### 「日本大学 学生 FD CHAmmiT 2013」当日の様子

前 川：当日の朝、到着して何をしましたか？

瀬戸山：まず到着してすぐに「日本大学 学生 FD CHAmmiT」の看板を表に設置しました。その後、前日に準備した設営の最終チェックを学生コアメンバー全員で確認しました。来場者を万全の態勢で待ち構えていました。

前 川：そして、いよいよ受付開始時間になり、多くの参加者が来場してきました。全員が席についたところで、村田英治教授のスピーチが始まり、私たち文理学部学生FDワーキンググループは出番に備えて、裏でこそこそスタンバイしていました。

瀬戸山：私がステージから会場全体を見て思ったのは、やっぱり人の数の多さでした。

前 川：そうだね。オープニングスピーチが始まったけど、すぐに私たちの出番がきたよ〔共同企画〕。

瀬戸山：寸劇形式でやったのは本当に正解だと思った。学生にも十分わかりやすいし、何より面白いし、楽しく見られました。

前 川：分かりやすくというのを企画の根幹にしているので、そう思ってもらえて本当に嬉しいな。その後、企画等説明が始まりました。教職員と学生のかけあいが、とても面白かったです。その後、移動して「学部ミーティング①」に突入しましたね。

瀬戸山：ここまでは特に何事もなく順調でした。

前 川：私は文理学部なので文理学部のテーブルにいましたが、かなり人数が多かったですね。

瀬戸山：そうなんですよね。学部によって人数に差があったので、4人の学部もあれば10人以上の学部もあり、それにより各テーブルにより進行が遅いテーブルもありました。なにより、時間が足りませんでした。

前 川：同じ学部の人だから、見たことある人もいたし、見たことない人もいたし、色々話せてよかったけど、本当に時間が足りなくて自己紹介だけで終わってしまった学部もあります。

瀬戸山：次回の課題ですね。

前 川：その後、また移動して「オール日大ミーティング」が始まりました。ランチ会でごはんを食べながら、アイスブレイクをし、そこから「ちゃみっとーく！」をして、発表会になりましたが、一部の学生コアメンバーは無線機をもって会場を巡回していました。私も無線機は持っていましたが、瀬戸山くんも無線機をもって動いていましたよね。

瀬戸山：「ちゃみっとーく！」で使用する紙がなかったり、ネームストラップがなくなったりとハプニン

グがあったので、各会場で起こった問題に対応するため、各フロア担当と連携を取りながら問題解決に徹していたのです。

前 川：そういえば私も連絡した。やっぱりハプニングはつきものだね。

瀬戸山：動きまくっていたので汗だくでした。そういえばランチ会の雰囲気はどうでしたか？

前 川：ランチ会は同じ文理学部の学生スタッフがいるところに入れていただいて、楽しくごはんを食べながらアイスブレイクできましたよ！雰囲気としてはよかったと思います。全体としてはみんなまじめそうでアイスブレイク難しいかなって心配したんだけど、面白い人もいて一人一人個性があって楽しくやれました。

瀬戸山：うまいことみんなしゃべれた感じかな？

前 川：そうですね。私の見た限りではとても良い雰囲気でした。ランチ会をちゃんと進めるようにするためにも、学生コアメンバーの動き方は今後の課題になりそうだね。

瀬戸山：そうだね。フラットに話し合いができるように用意したお菓子の減りが少なくてファシリテーションがうまくいかない感じもしたな。お菓子が持つ役割を果たせるよう、学生コアメンバーが呼びかけることも大切だね。そうして「ちゃみっとーく！」発表会の時間になって、各教室いろいろ見たけど、どの班もしっかり発表はできていたね。

前 川：うん。みんな最初より緊張も解けてきて、いい感じで連携して発表していた。

瀬戸山：その後、「学部ミーティング②」が始まったんだよね。

前 川：そう！私はある学部の“歴史が動いた瞬間”に立ち会うことができたんだ。ある学部はミーティングの途中で話が盛り上がりちゃって、文理学部学生FDワーキンググループの活動を私が話したら、「学生FD活動を自分たちの学部でもできるのでは！」という流れになって、自学部でも学生FD活動をするようになったみたい。

瀬戸山：すごいね！こうやって学生FDについて学部浸透していけばいいよね。

前 川：他の学部はどうだったの？

瀬戸山：全体的によかったと思うけど、企画の趣旨をもう少し参加者に理解してもらう必要があると思った。

前 川：そうだね。そして、最初の会場に移動して、代表の3学部を発表してもらったんだよね。

瀬戸山：うん。発表した3学部はどこもいい発表をしてくれたよね。

前 川：それぞれ違う意見が聞けて面白かったよ。

瀬戸山：面白い意見がたくさんありましたね。こうして、全てのプログラムを終了し、最後の懇親会を終えて、第1回目となる「日本大学 学生FD CHAmmiT」が終了となりました。

### 3 参加者アンケート結果から見る今後の課題と展望

平成26年2月26日（水）、本学法学部において開催された「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013」は、本学における全ての各学部等から学生86名・教員18名・職員22名、合計126名が参加し、学生・教員・職員三位一体となった体制での学生参画型FDを実現するイベントとなった。終了後に実施された「参加者アンケート」は、本学において初めての試みである「学生企画を大幅に含んだ全学的なFD推進イベント」を参加者がどう受け止めたかを明瞭に示すものである。

そこで以下では、問1～12に渡って実施された「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013 参加者アンケート」の各設問を振り返りつつ、それぞれに対するリアクションから、「日本大学 学生FD CHAmmiT」の今後の

課題と展望を探っていききたい。

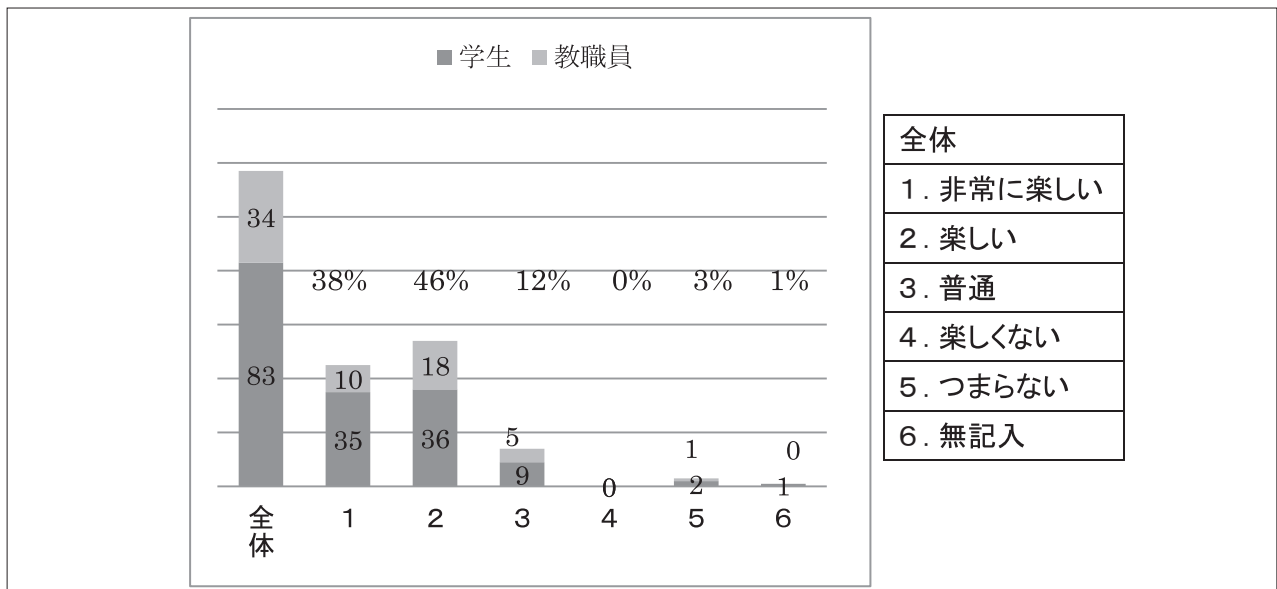
1 (2) . 今回のイベント以前に「FD」(「学生FD」)について知っていましたか？

そもそも、「FD」と「学生FD」の違いとは何なのだろうか。「FD」とは教員を中心とした教育改善活動を指す。元々の「FD」に教員だけでなく学生の意見や視点を取り入れた教育改善活動を「学生FD」と言うのである。

参加した学生の4人に1人しか「FD」についての認知がなかった。しかし、教職員の回答においてはほとんどが認知済みとのことであった。結果的に、全体では参加者の約半分が「FD」を知った上でのイベントの開催となった。

しかし、「FD」は知っているも「学生FD」は知らないという人が学生、教職員共に多いことが分かった。また、学生の意見や視点から教育改善活動に参加することは浸透していないことが分かる。

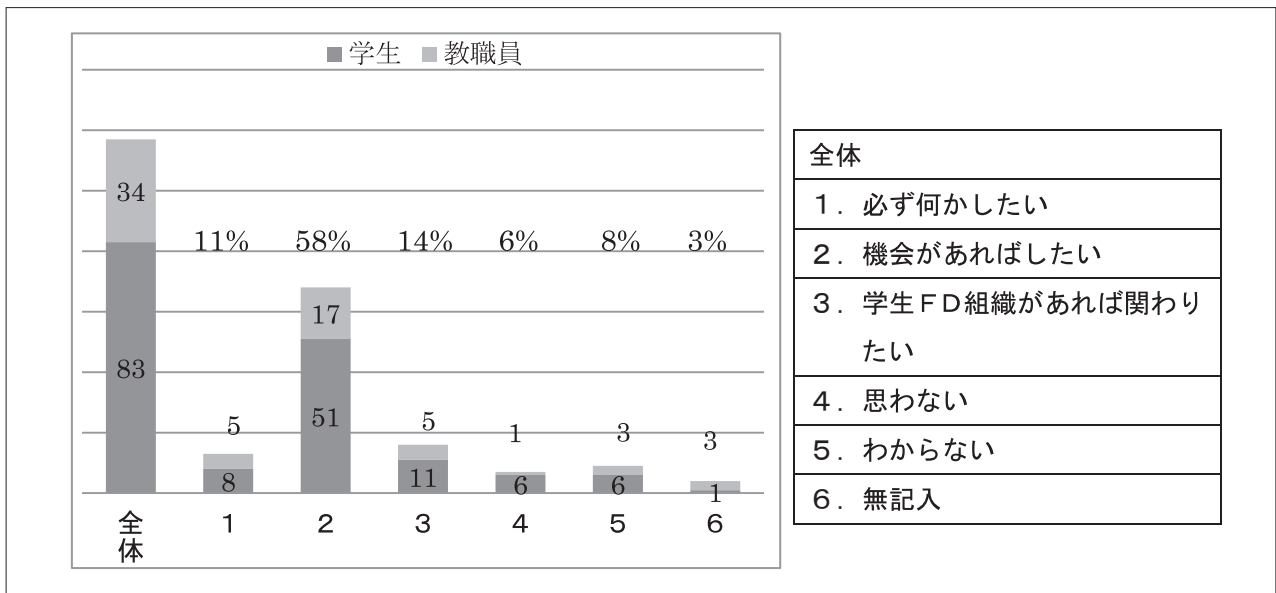
3 本日のイベントは、全体的に楽しめましたか？



「1. 非常に楽しい」, 「2. 楽しい」と答えた人が各38%, 46%と全体の8割以上の方が今回の「日本大学学生FD CHAmmiT 2013」を楽しめたと回答している。この評価に関しては、私たち学生コアメンバーにとってもこれまでの企画から運営までの準備を評価されて、非常に嬉しい限りである。また、楽しくないと答えた人は学生、教職員共に0%であり、今回のイベントは参加者各々楽しめたようだ。

しかし、一方、「3. 普通」, 「5. つまらない」と答えた人も各12%, 3%と今回のイベントに満足していない人もいるのは事実である。受動的にイベントに参加するのではなく、能動的に参加し、たくさんの意見交換がなされる場になるよう私たち学生コアメンバーも改善が必要である。

4 本日のイベントを通じて、学部に戻り、学生FDについて何か行動を起こしたいと思われましたか。



「1. 必ず何かしたい」、「2. 機会があればしたい」、「3. 学生FD組織があれば関わりたい」と答えた人が各11%、58%、14%と8割以上の人が、今後、学生FD活動に積極的な回答をした。これは、参加者の約7割が学生FDについての認知がない中での回答であり、今回のイベントにおける大きな成果を示すものであると言えるだろう。特に学生については、参加者の8割以上が学生FDの認知がないにも関わらず、同様の比率である8割を超える人が、今回のイベントのみで学生FD活動に興味を示し、肯定的であったことが分かった。

行動を起こしたいと回答していただいた人のコメントを紹介する。

学生

- ・「今の講義には改善する余地があるのかもしれないという意識、向上心を持っていきたい。」
- ・「今回のディスカッションではTAが少ないなどの意見があったため、自分からTAをやって教職員・学生の手助けをしたいと思った。」
- ・「残り1年の学部生のうちに、できることを進めたり、後輩に足跡を残したいと思った。」

教職員

- ・「ぜひ学部にも学生FDの開催をしたいと思う。」

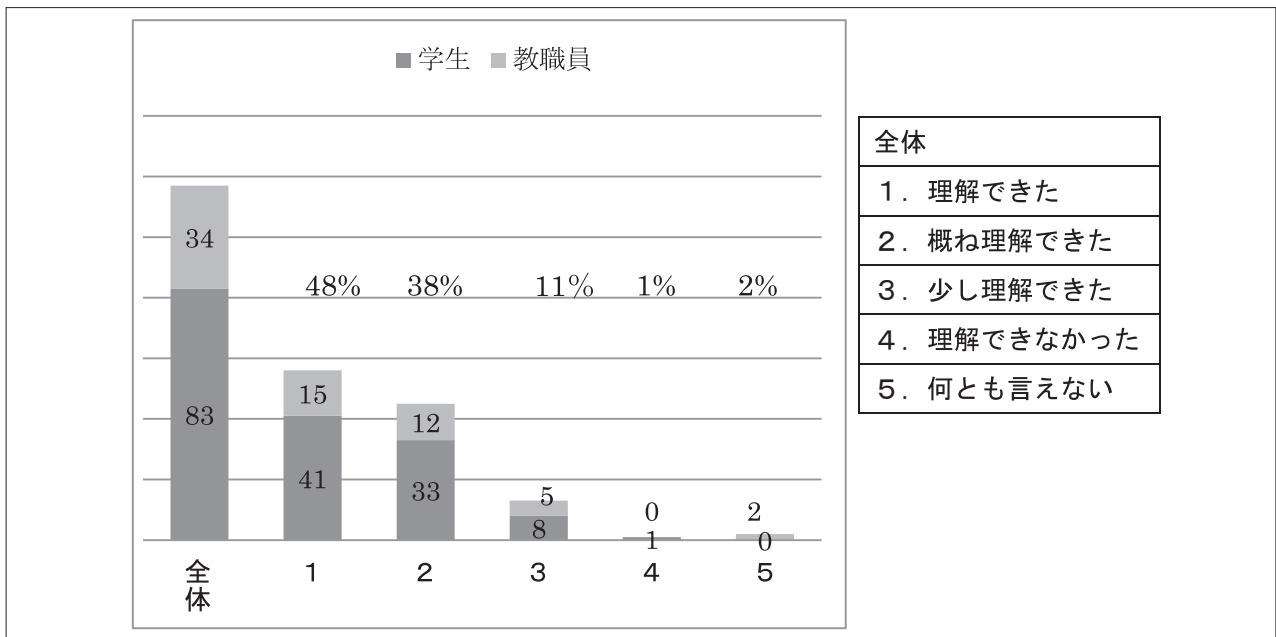
一方で、「4. 思わない」、「5. わからない」という回答も各6%、8%である。「わからない」と回答した学生からは、次のようなコメントがあった。

学生

- ・「今回せっかく各学科集まって話し合ったが、ここで終わっては学科に一人しかFDについて伝わらないことになる。何かしらやれば良いと思うけど、もう卒業なので。」

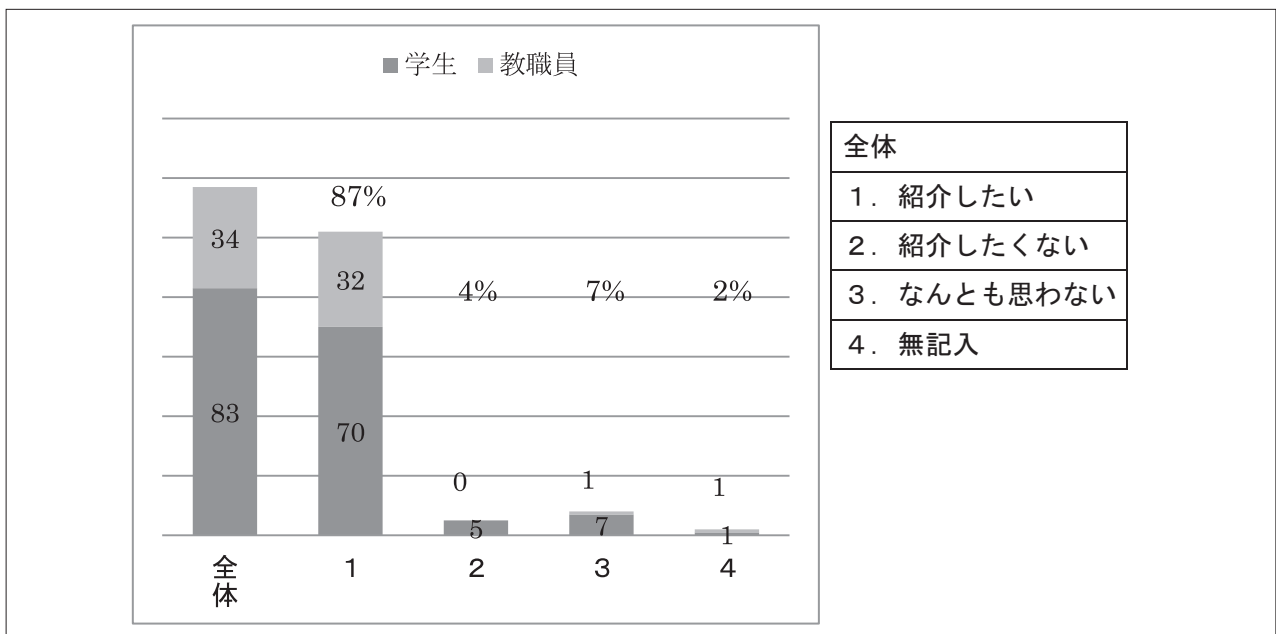
確かに学科一人しかイベントに参加することのできない難点は否定できない。しかし、学科単位ではなく学部というもう一回り大きな組織まで視野を広げると、学生FDを知っている人は一人ではない。少人数ではあるが、まずは学部単位で学生FD活動を展開していくことが学生FD認知度を上げることに繋がる。私たち学生コアメンバーも実際は学生FDを知っていた人は少なく、その中で学生FDについての知識を深め、この企画までたどり着くことができた。是非、今からでも学部単位の学生FD活動に行動を起こしてほしいと願う。

5 本日のイベントを通じて、「学生FD」について理解を深めることはできましたか。



「1. 理解できた」、「2. 概ね理解できた」、「3. 少し理解できた」と回答した人は、各48%、38%、11%と今回のイベントで学生FDの理解を深めることができた参加者は全体の97%であり、参加者ほぼ全員が学生FDについて何らかの知識を各学部を持ち帰ることができている。是非とも深めた理解をそのままにせず、学生FDを広めることができるような活動へと繋げてほしい。

6 「学生FD」を他の学生・教職員にも紹介したいと思いましたか。また、その理由は何ですか。



「1. 紹介したい」と回答した人は全体の87%であり、教職員については34人中32人が紹介したいと「学生FD」の周知活動に肯定的であることが分かった。

紹介したいと回答していただいた人の理由は、次のとおりである。

### 学生

- ・「自分の後輩となる人に意欲的に学んでほしいから。」
- ・「もっと大学についての改善点などを共有し、よりよい大学をつくっていければいいなと思うから。」
- ・「変えたいという思いにこういう名前がある方が有利に動けるかもしれないから。」

### 教職員

- ・「大学教育をよくしたいと思っている学生がいることを知れば教員側の意欲が上がるはず。」
- ・「大学の授業、教育活動の改善にも生徒も参画することができるのを知ることは意義があると考えらるから。」
- ・「カリキュラムや設備の実態を良く知っている先生たちの声が、FD活動の活性化に必要であると思うから。」

しかし、5において「学生FD」についての理解を深めることができたのにも関わらず「3. 紹介したくない」、 「3. なんとも思わない」と答えた人もいることは事実だ。

「2. 紹介したくない」、「3. なんとも思わない」と回答した方の理由は、次のとおりである。

### 学生

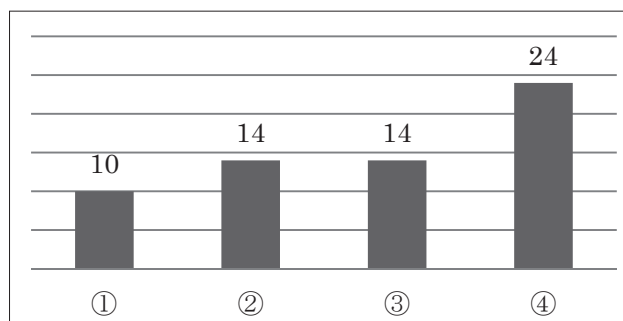
- ・「あまり無理に人から誘われて行動するものではないから。」
- ・「イベント開催が目的になっている。」
- ・「これが良い方向につながるか、それとも改善されないかはわからないから。」

今回の「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」は、本学全体における学生FD活動の初めての試みである。学生FDという活動自体を知らない学生が多い中で、この1回のイベントで授業が劇的に改善されるとは思えない。今回のイベントの大きな目標は「まず、学生FDの認知度を上げ、各学部を持ち帰ってくれること」である。良い方向につながるか、つながらないかを左右するのは、今回参加した学生、教職員がどれだけ所属学部を持ち帰り、他の人たちに学生FDを紹介するかに懸かっているといっても過言ではない。

私たち学生コアメンバーも、もっとこの活動を広めたいと思えるような「日本大学 学生FD CHAmmit」にしていけるよう、改善していく必要がある。

## 7 「学生FD」を進めていくためには何が必要であると思いますか。

「学生FD」を進めていくためには何が必要であるかという問いに対しては、学生80名・教職員31名、総計111名からの回答があった。第7項の問いは自由記述形式である。要旨で見た場合、下表に示したような回答タイプに分かれた。



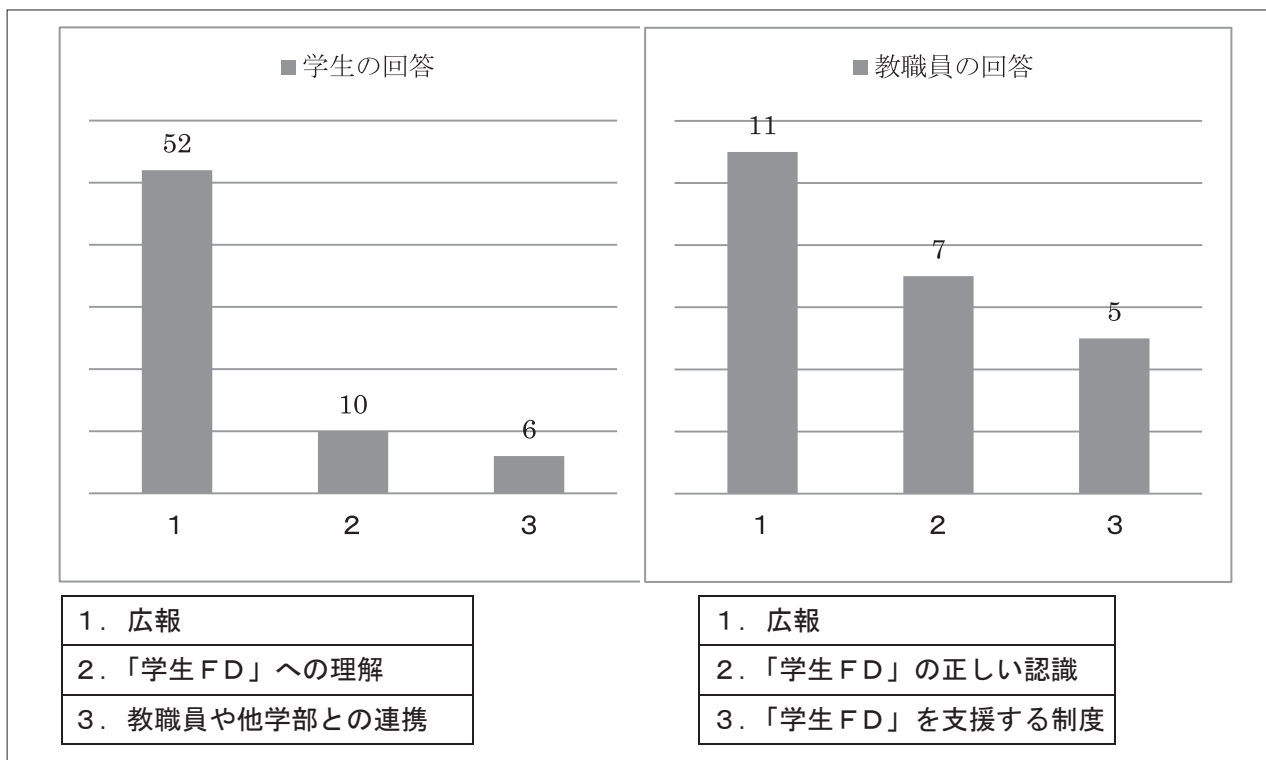
問：「学生FD」を進めていくためには何が必要であると思いますか。		
必要とするもの	同意件数	コメントの抜粋
① 学生・教員・職員の三者 一体となった運営団体	10	・学・教・職の連携プレイ ・学・教・職で運営されたFD活動を行う母体
② 「日本大学 学生 FD CHAmmiT」等のイベ ントの機会	14	・今回のような機会 ・定期的なイベント。日本大学は学部・学科が多くあるので、日本大学 だけでのイベントでも（今回のような）大変有意義であると思う。
③ 教職員，学生の向上心	14	・教職員の協力と学生の向上心 ・意識の高い学生が必要 ・学生のやる気と，それを支えてくれる教職員の存在
④ 広報活動・報告	24	・学生FDを多くの学生に知ってもらう必要 ・今回のFDの意見，発表をもとに，改善された点を日本大学全体に伝わ るようになる。学生FDのことをもっともっと知ってもらうようにする。

上表から、「学生FD」を進めていくには、まずは「学生FD」を周知する、活動を報告するといった広報活動が大切であると回答した教職員・学生が最も多かった。これは、まずは自分が興味関心を持たない限り、学生FDを他の学生に知らせようという意見は出ないはずである。この回答からも、「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013」を通して、学生FDに興味関心を持っていたことが伺える。私たち学生コアメンバーは学生FDイベントの企画・運営はもちろんだが、今後は、学生FDの周知・浸透に向け、広報活動にも力を入れていくべきではないか。

また、「学生・教員・職員の三者による運営団体」、「『日本大学 学生FD CHAmmiT』等のイベントの機会」が必要、などの意見が多く集められたが、注目すべきは「教職員，学生の向上心」である。いくら広報活動や運営団体や機会を作ったとしても、それを行う人の向上心が失われては活動の意味がなくなる。「学生FD」を単なるイベントや活動とするのではなく、意味のある目的意識を持った活動になっていくことを、第1回学生コアメンバーとして切に願う。

8 「学生FD」に参画する学生や教職員を増やすには何が必要であると思いますか。

学生 74 名・教職員 29 名, 計 103 名からの回答があった。第 8 項と同様, 要旨別に下図のようにまとめる。



次に, 具体的な回答例を紹介する。

学生

- ・「私も教員の 1 人から言われて知り, 友人は全く知らなかったので, もっと大々的にFDの存在を宣伝した方が良いと思う。」

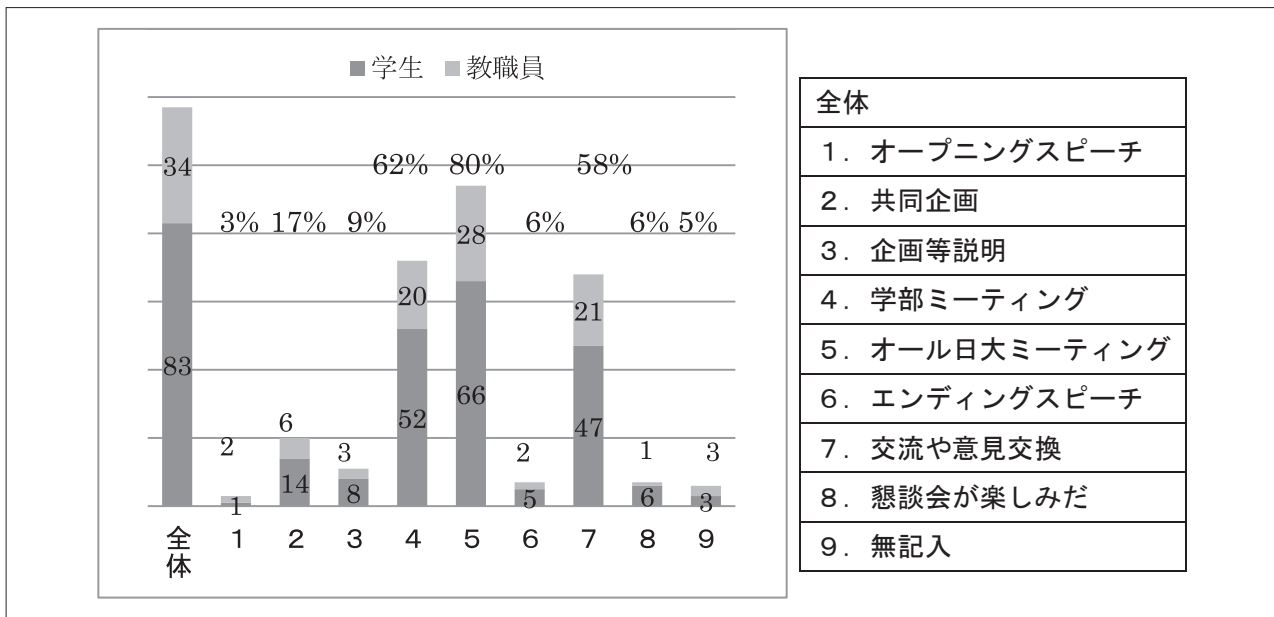
教職員

- ・「FDに対する正しい理解を深めていくことである。」

学生の求める「広報」は単に「学生FD」活動の周知を求めているのに対し, 教職員の求める「広報」は「FD・学生FD」についてある程度知識があることを前提に, 正しい理解の促進がされるものを示唆している。このことから, 同様の「広報」活動であっても全く異なるアプローチが必要となってくることが予想される。例えば, 学生向けには「ポスターやSNSを駆使した周知活動」, 教職員向けには「学生参画型FDを推進するための研修, 講演会の充実」等が, アンケート解釈の一つとして一定の需要があるとみることができるだろう。



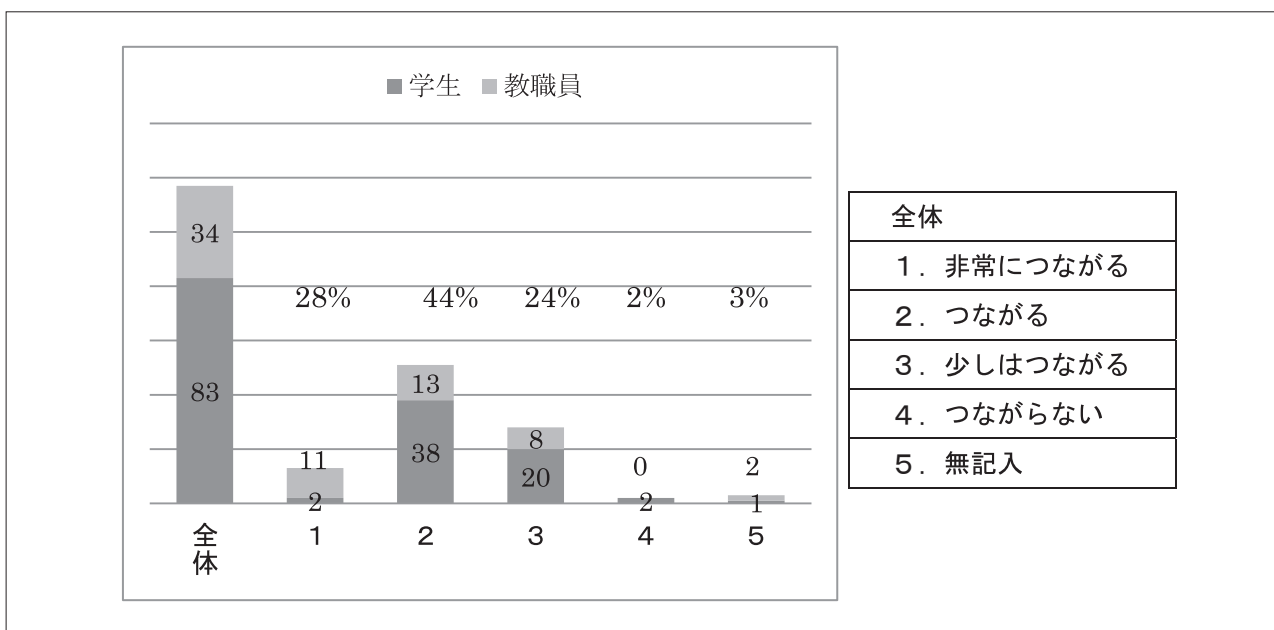
9 本日のイベントで有意義であったプログラムなどはどれですか。(複数回答可)



最も票を集めたのが「5. オール日大ミーティング (80%)」, 「4. 学部ミーティング (62%)」, 「7. 他学部の参加者と交流や意見交換できたこと (58%)」であった。

ここでは、あまり得票のなかった「2. 共同企画 (17%)」「3. 企画等説明 (9%)」に着目したい。両プログラムの実施目的は、それぞれ「FDの基礎知識紹介」, 「学生と教職員がともに円滑に話し合うためのマナー解説」だが、次回開催以降、より満足度向上を目指すべきかもしれない。それは、「学生FD」に対する参加者の認識を深め、主プログラムである「オール日大ミーティング」「学部ミーティング」を充実させる試みに直結するものである。前述した第8項アンケートの回答で期待されたような、「FD・学生FDに対する正しい理解」のためにも不可欠だろう。

10 「学生FD」は、日本大学の教育（授業）改善につながると感じますか。



ポジティブな回答「2. つながる (44%)」が圧倒的多数を占めた中で、ネガティブな回答「4. つながらない (2%)」が少数存在することに留意したい。

この項目に関連して、後述の第12項アンケートに次のようなコメントがある。

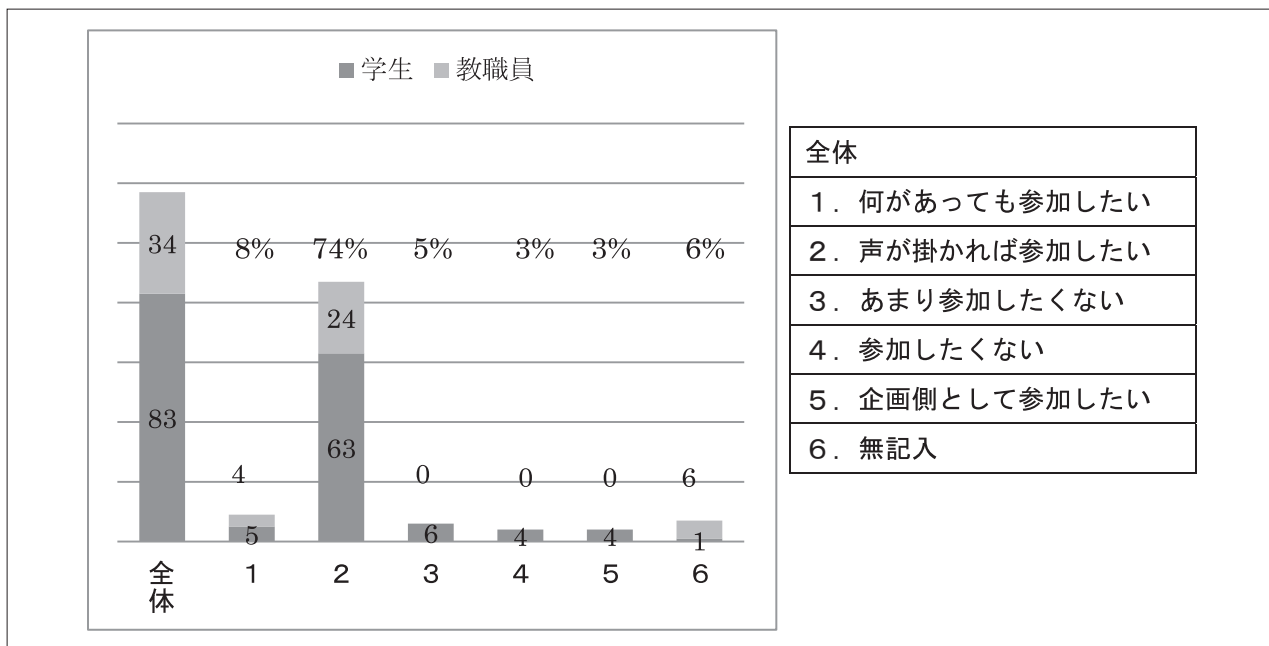
学生

・「話し合うだけで終わっては意味がないので、『日本大学 学生 FD CHAmmit 2013』前後での変化を実感したいです。」

「日本大学 学生 FD CHAmmit 2013」は、複数の大学が集い開催する主旨のイベントとは異なり、開催日に共有・発信されるメッセージが直に各学部等に設置されたFD委員会等に向けられる期待を帯びている。しかしながら、「学部ミーティング」「オール日大ミーティング」は、アンケートを参照する限り「学生・教員・職員による意見交換の場」としては十分な役割を果たしても、意見がローカルな活動成果として記録され、推進される動きを誘発する仕組みを持つものではなかった。その結果が、前述のアンケートに見られる「4. つながらない (2%)」との回答である。これに対する対策を講じることは容易ではないが、今後、意見を伝達していく手順を確立する等の工夫をしていく必要があると思われる。

11 次年度もこのようなイベントが開催されるとしたら、参加したいですか。

(最終学年の方は、学年を考慮せずにお答えください。)



着目すべきは、学生によるネガティブな意見「3. あまり参加したくない (6名)」「4. 参加したくない (4名)」が計10名を記録している点である。参加者総数126名からして、12~13人に一人が次回の参加を望んでいない。主要プログラム「オール日大ミーティング」の一班が11~14名構成だったことを考えると、各テーブルにつき1人が「イベントを楽しめなかった」とも捉えることができるだろう。この観点から、プログラムの「親しみやすさ、理解しやすさ」は次回開催以降の課題の一つかもしれない。

12 「学生FD」または「日本大学 学生 FD CHAmmit 2013」についてご意見などがありましたら、ご自由に記入してください。

第12項は自由記述でイベント全体を評価するためのものであるが、本項目でも上の問いに対するコメントを踏まえ、全体を俯瞰して今後の課題と展望としたい。それぞれ、学生59名、教職員21名の合計80名

による意見が寄せられた。次に、学生・教職員で最も多かった主旨のコメントを紹介する。

#### 学生

- ・「普段、交流できない学科、他学部と様々な話ができ、とても有意義なものになった。」

#### 教職員

- ・「学生の本音が聞ける素晴らしい機会でした。」
- ・「他学部の学生さんと交流できて学生さんの生の声を聞くことができたので、非常に参考になりました。」

学生・教員・職員、さらには、学部の垣根を越えた意見交換の場を持てることは、間違いなく「日本大学学生FD CHAmmit」の利点であるといえそうだ。他方で、次のような意見も寄せられている。

#### 教職員

- ・「FDについての基本的理解がないままにただ自由に意見を出し合うだけでは、全学的な意識的取り組みにはつながらない。」

「学生FD CHAmmit 2013」に招集された多くの学生が「FD」に予備知識がないままに参加を求められたことで、日頃からFD活動に取り組む教職員との議論において、すれ違いを生じさせてしまった。手法に工夫が必要だが、初めて「FD」「学生FD」に触れる学生が公平に意見を発信することができるよう、導入プログラムや配付資料の再検討が必要である。最後に、学生FD活動の多様性について述べた学生のコメントを引用する。

#### 学生

- ・「FDが必要な背景は学部によって差があると予想されます。よって学部ごとに必要とするFD手法もまた同一とは限らないのではないのでしょうか。分散型キャンパスを利点と考え、各々の学部で不足し、他学部では充足している要素を積極的に取り入れられるよう密に情報交換をしてはいかがでしょうか。」

「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」には、大学に対するさまざまな思いを持った学生・教員・職員が参加した。この「参加者アンケート」を運営者だけのものにしないためにも、ここに集計からみる学生の反省と気づきを残し、次年度以降の糧としていきたい。

## おわりに～エピローグ～

平成25年、夏休みも終わり授業へと切り替えつつある10月のことだった。急に教授から一本の電話が入った。内容は、「大学の授業・教育・学修を改善する『日本大学 学生FD CHAmmit 2013』の学生メンバーを頼みたい。平成25年11月16日に東京で第1回ミーティングがあるから是非行ってみてくれ。」とのこと。学生FD自体聞いたことなかったが、普段の大学の授業に少々不満を感じていた私は、教授の誘いを了承した。これが学生FDとの出会いだった。ふたを開ければ、企画・運営に関しては前例もない、全くの白紙状態から150人規模で行う「日本大学 学生FD CHAmmit」の企画を1か月で決定させ、次のミーティングでプレゼンテーションせよ、とのことで、今考えればかなりの「無茶振り」だった。こうして平成25年11月16日から平成26年2月26日までの間、私の大学生活の中でも特に忙しく頭を悩め、しかし、仲間を支えられながら、とても濃い充実した日々が始まったのだった。

学生FDで出会うことができた仲間や教職員の皆様には感謝しきれない。この「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」を通して自分自身も大きく成長できたと実感している。同時に、学生FD活動への思いは一層強くなった。この「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」をきっかけにして本学の学生FD活動が広まり、日本大学としてのブランドを生かした教育へと、教職員、学生共々意識の向上へと繋がっていくと確

信している。日本大学で働く教職員、学ぶ学生にとって、誇れる日本大学となるよう、今後の学生FDの展開に期待する。

## 注

1. 全国の大学を対象として、学生FDを実施しているあるいは興味のある学生団体などが集まり、お互いの情報を共有又はテーマについて話し合いを行うイベント。現在は、夏と冬（春）の年2回、関西と関東の大学の持ち回りで開催している。
2. 岡山大学教育開発センター学生・教職員教育改善専門委員会が主催する全国の大学を対象とした学生FDイベント。「学生FDサミット」との違いは、特定のテーマを設定し、しゃべり場などの話し合いを通じて、一定の結論を求めることが特徴である。
3. 日本大学FD推進センターからは、平成25年度全学FD委員会委員であった原直久教授（芸術学部）、田中將義教授（生産工学部）、羽入敏樹教授（短期大学部船橋校舎）に加え、大嶽龍一学務部教育推進課課長補佐、内田修学務部教育推進課主任（当時）、後藤裕哉学務部教育推進課主任を派遣した。
4. 学生を中心として、教員・職員の三者が一つのグループとなり、特定のテーマについて、自由な雰囲気の中で話し合いを行う場。主にKJ法などを用いて、コメントを付せん紙などに記入しながら話を進めていく方法をとる。
5. SA（スチューデント・アシスタント）は、コンピューター科目や実験・実習科目等のほか、受講に際しての留学生への対応や、ハンディキャップのある受講生等への学修補佐を行う学部学生をいう。（『日本大学FDガイドブック2014 - “自主創造のための Learning Guide” p.41.）LA（ラーニング・アシスタント）は、関西学院大学で実施している制度で、授業担当者の授業運営の補佐、履修学生の指導や相談をとおして教育および学習の支援を行う制度をいう。（関西学院大学ウェブサイト [http://www.kwansei.ac.jp/cjle/cjle\\_006065.html](http://www.kwansei.ac.jp/cjle/cjle_006065.html)）
6. 「日本大学 学生FD CHAmiT 2013」において、学生企画を企画・運営するスタッフとしての各学部等からの推薦者各1名（計15名）及び文理学部学生FDワーキンググループの学生5名の合計20名からなる運営スタッフ。

## 「日本大学 学生 FD CHAmmit 2013」学生コアメンバー，教職員スタッフ

代 表：瀬 良 兼 司〔商学部〕  
 副 代 表：田 仲 義 典〔経済学部〕  
 共同企画担当代表：今 宮 加奈未〔文理学部学生FDワーキンググループ代表〕  
 企画運営担当代表：浅 野 和香奈〔工学部〕  
 資料作成担当代表：瀬戸山 自 然〔通信教育部〕  
 資料作成担当：近 藤 晃 生〔文理学部学生FDワーキンググループ〕  
 資料作成担当：安 田 結 城〔文理学部学生FDワーキンググループ副代表〕  
 資料作成担当：野 崎 宮 香〔生物資源科学部〕  
 企画運営担当：石 堂 浩 暉〔文理学部学生FDワーキンググループ〕  
 企画運営担当：前 川 貴 恵〔文理学部学生FDワーキンググループ広報・総務〕  
 企画運営担当：渡 邊 阜 暉〔法学部〕  
 企画運営担当：木 村 圭 汰〔文理学部〕  
 企画運営担当：中 野 達 也〔芸術学部〕  
 企画運営担当：森 谷 賢 太〔国際関係学部〕  
 企画運営担当：石 井 信 行〔理工学部〕  
 企画運営担当：大 場 眞 依〔生産工学部〕  
 企画運営担当：谷 原 茉莉子〔医学部〕  
 企画運営担当：谷 皇 子〔歯学部〕  
 企画運営担当：鈴 木 昇 建〔松戸歯学部〕  
 企画運営担当：小 田 薫〔薬学部〕  
 村 田 英 治〔全学FD委員会プログラムワーキンググループリーダー・商学部教授〕  
 原 直 久〔全学FD委員会プログラムワーキンググループ・芸術学部教授〕  
 羽 入 敏 樹〔全学FD委員会プログラムワーキンググループ・短期大学部船橋校舎教授〕  
 並 木 洋 明〔全学FD委員会プログラムワーキンググループ・学務部教育推進課長〕  
 大 嶽 龍 一〔全学FD委員会プログラムワーキンググループ・学務部教育推進課課長補佐〕  
 後 藤 裕 哉〔全学FD委員会プログラムワーキンググループ・学務部教育推進課主任〕  
 田 子 俊 哉〔学務部教育推進課〕

平成 26 年 2 月 26 日現在

